外国人報道画家が見た日本の芸能
――海外絵入新聞に描かれた幕末・明治――

吉　田　弥　生

要　旨

天保13年（1842年），日本の幕府が外国船打払令を廃止したのとほぼ時を同じくして，海外では絵入新聞が産声をあげていた。日本の開国を機に，海外の絵入新聞社からは日本へ通信員・報道画家たちが派遣された。彼らが滞在した頃の日本は，大政奉還・王政復古といった激動の時代にあったが，絵入新聞挿絵の多くは日本の風俗を中心に描かれている。なかでも幕末・明治期の芸能の様子を写した挿絵は当時の日本の芸能を克明に描いていると見え，いつの，どこの劇場における，どの上演を描いたものか，という興味がつきない。

そこで，「THE GRAPHIC」，ワーグマンのスケッチで知られる「THE ILLUSTRATED LONDON NEWS」，フランスの「LE TOUR DU MONDE」等，海外で発行された絵入新聞（国立劇場所蔵資料より）の例を幾つかとりあげ，報道画家が描いた日本各地の芸能の様相を同時代の芸能を題材とした芝居絵や劇場図と比較しながら，海外メディアに紹介された幕末・明治の日本の各都市における芸能について考証する。

1 「THE ILLUSTRATED LONDON NEWS」と特派画家ワーグマン

天保13年（1842年）8月，日本の幕府は外国船打払令を廃止した。これと時を同じくして，1842年の5月，イギリスで「THE ILLUSTRATED LONDON NEWS」という絵入新聞が誕生している。

この絵入新聞に関しては，明治期の新聞を紹介する展示や近代史に関する著書などで，様々にそして断片的に紹介されてきており，よく知られてきた。創刊者であるハーバート・イングラムは，新聞にまだ写真を印刷する技術が本格的に導入できなかった当時，挿絵入りの新聞が読者のニーズにかなうことを確信して，木版画の挿絵をその画像の役割とした絵入新聞を創始した。その後，他の日刊紙が写真版の時代になっても，写真を毛筆画におこしてから製版した。(1) つまりは，それほど挿絵，絵にこだわった新聞だったといえるだろう。

取材の主な対象は世界で起きている戦争と国家的行事だったが，ペリーが来航した1853年，初めて日本に関する記事が登場する。ペリー提督の日本訪問についての詳細を伝え，そして徳川慶喜，明治天皇とイギリス外交官の謁見の場にも画家を入れて，当時の日本人さえ近づけな

かった状況を西洋の読者に伝えた。「THE ILLUSTRATED LONDON NEWS」は当時において，世界のニュースを最も先駆的に，かつ徹底的に取材し，通信するメディアであった。

しかし，まだこのあたりの取材は，日本駐在の通信員ではなく，香港や広東の駐在員からの報告だったようである。そのうちに対日関心が高まったと考えられ，1861年にチャールズ・ワーグマンという「特派画家兼通信員」を日本へ送り込むことになった。

ワーグマンは，その後日清戦争や日英同盟などの重要事件についても取材し，通信している。彼は来日してまもなく，日本人女性（小沢カネ）と結婚し，来日30年後の1891年に横浜で死去するまで日本の各地で日本の生活や風俗に関心をよせては絵に描き，画信を送り続けた。

なお，ワーグマンは1861年の４月25日に長崎へ入港し，最初の通信を５月19日に書いたことが通信文からわかっているが，実際にそれが掲載されたのは８月10日号である。記事は書いてからおおよそ２ヶ月半ほど後に掲載されたということになる。つまり，先駆的に取材といっても，当時の通信状況は現代とはかなりの差があることを理解しておかなければならない。

６月６日，横浜に到着したワーグマンは，まず大道で芸を披露する講釈師の様子をスケッチし，それを先の最初の通信であった８月10日号に載せている。何日分かの通信文といくつかのスケッチをためて新聞社に送っていたらしいのだが，それと同時に，ワーグマンの日本への関心が初期の頃より日本の芸能に向けられていたことがその内容から知られる。

ところが，国立劇場の所蔵する新聞資料「SKETCHES IN JAPAN BY OUR SPECIAL ARTIST THE STORYTERRER（A DAILY SCENE）IN YOKUHAMA」(2) を見ると，それは確かにワーグマンの眼を通してみた日本の幕末の姿なのであろうが，少々の違和感を覚えずにはいられないのであった。まず，彼が横浜の「講釈師」と紹介する芸人は三味線を弾いている。通常は釈台に本を置き，扇子を持つのが講釈師のスタイルであるが，それとも異なる。ならばジャンルを固定しがたい類の「大道芸人」というべきか。

実は筆者自身が外国の絵入新聞の原資料を初めて目にしたのはこの絵であるが，ワーグマンの解釈と描かれた対象となった実際の芸能には多少のズレがあるのではないか，とこの挿絵は示唆してくれたのである。他例をも検討したい。

2 「京都の劇場における日本の踊り」

そこで次に着目したのは，「A JAPANESE BALLET AT THE THEATRE OF KYOTO」(3)「京都の劇場における日本の踊り」と題された１枚である。国立劇場の『近代歌舞伎年表　京都篇』第１巻にも紹介されている，ワーグマンのスケッチとしては知られた挿絵である。

舞台上には女性とおぼしき演者が横一列にならんで同じ動きをみせている。観客席には髷姿の男性が目立つ。天井から吊られた提灯の丸い３つの白抜きから，この芸能が京都の「都をどり」とわかる。

さて，「都をどり」は，挿絵の１年前の1872年（明治５年），第１回京都博覧会が開催された

際に「附博覧」，余興として行われたのにはじまる。現在「都をどり」は祇園の花見小路にある歌舞練場で開かれている。最も信頼できる沿革を知ろうと，社団法人京都市観光協会と祇園甲部歌舞会が発行するパンフレットを見れば，沿革に関する説明は英文のみで紹介されている（今や日本人よりも海外からの観光客のほうがよほど「都をどり」に対する関心が深いということのあらわれであろうか）。(4) さらに調べてみると，現在の歌舞練場とは，1935年（昭和10年）に移転したものであり，その前身は現在地に程近い場所に明治６年，つまりこの挿絵が描かれた1873年に建てられた歌舞練場で，ここを常設会場として上演されてきたようである。

では，ワーグマンが描いた劇場，その場内は，明治6年に建てられた歌舞練場の場内なのであろうか。この通信は２月15日だが，前に紹介した「横浜の講釈師」と題された挿絵の例をとって考えてみても，描いてすぐに掲載されることは考えにくいことがわかっている。したがって1873年建造の歌舞練場ではないと思われるのである。

では，一体場所はどこか，ということになる。そこで，第１回京都博覧会の余興のあった場所を調べると，「祇園新地橋東入南側」の「貸席　松の屋」だったと知れる。ところが，これはあくまでも時間的にみて相当する場所である。挿絵をみるかぎり随分と立派な劇場のようでもあり，はたして花道や桟敷席も「松の屋」に特設されたものかどうかと，会場については疑問が残る。ワーグマンによってデフォルメされたのではないかとも思える。当時の「松の屋」の室内を描いたものが残っていれば問題がないが，現在見ることができない。しかし，博覧会の目的が遷都後の京都の王朝以来の歴史と誇りを守るというものであったから，この挿絵程度の舞台を「松の屋」が特設したことも否定はできない。

では，その演技や扮装について書かれたワーグマンの文章を参考にしてみたい。

> The ballet-girls advanced along a matted way, leading from the side entrance, right across the pit on the left, in slow time, with faces perfectly expressionless and painted ghastly white. They trod a measure in slow time, and arriving on the stage, “went into figures” as they say in America. The female musicians on girls were acting. The dresses were splendid, and the action in perfect time. There is no pirouetting or jumping about, as with us, but postures, the principle of dancing here being the their arms. Another great difference was that, whereas our ballet-girls show their legs, as well as portions of the upper part of their bodies, and of their arms, these girls had their legs completely covered, only their feet ware naked. There were many different dances, and performances was very pretty indeed. The lights were rather dazzing, but it would have been better in the day time.

非常によく観察され，日本と西洋の舞踏の本質的な違いにふれていることがわかる。日本の舞踊でも，舞と踊りには前者が水平の動きを中心とし，後者は縦の動きに特徴をもつ，といっ

たように違いがあり，都をどりで披露される井上流は舞であるから，水平の動きを主としている。また，動きと動きの間に静止でかたちを見せるのも日本舞踊の特徴であり，次々と動きを展開させていく西洋のバレエと相違のあるところといえる。ワーグマンの通信文には，その点が指摘されているのである。

そして，日本は手，西洋は脚で踊るという指摘が見られる。もちろん，日本の舞踊も脚を使い，西洋のバレエも手を使うが，比べて見れば，そのウェイトの置かれ方に関してみれば，ワーグマンの言葉はよく言い表しているのではないだろうか。

また，「もうひとつの大きな相違は，我国のバレエの踊り子たちは，体の上部と腕の一部とともに脚を見せるのだが，当地の少女たちは，脚を完全に覆い，足先が露出しているだけである。」という意見は，日本人の羞恥心，いわゆる〈恥の文化〉という日本文化の特色につながる指摘でもあり，なおかつ日本の舞踊が脚を完全に隠しても表現が可能であるという，日本舞踊特有の性質が表れてもいる。西洋の舞踏（クラシックバレエのチュチュを思い浮かべれば瞭然）が衣裳の工夫で重要な脚の動きを見せるためであるのと，その違いが衣裳に表われているということなのであろう。

ワーグマンが1872年（明治５年）の京都祇園で，都をどりを観たことは確実といってよいだろう。そして，その通信文とは，欧米の舞踊と比較の視点をもって書かれていたものだったのである。

3 「大阪で見た日本の芝居」

次に「SKETCHES IN JAPAN: THE THEATRE AT OSAKA」(5)（大阪で見た日本の芝居）と題された資料を検討したい。これも通信文を参考に挿絵の内容を考察したいのだが，筆者の管見に入った使用資料（国立劇場所蔵）には該当の文章が付随されておらず，金井圓氏の『描かれた幕末明治』に収められた訳によることとしたい。

> 大阪の劇場の，少なくとも数ある劇場のうちのひとつの内部を示している。一つの通りに５つも劇場がある。どの劇場も大変大きく，平土間，仕切り席，天井桟敷のあるところはわが国のものと同じ造りである。

大阪は一つの通りに５つも劇場がある，という通信文であるが，今ここで，同時期の大阪の芝居町を把握しておく必要があるだろう。

そこで参考となるのが「明治初年の大阪劇場地図」（『近代歌舞伎年表　大阪篇』第１巻収載）であるが，この地図によれば当時の大阪道頓堀の芝居町にある劇場は六つ数えられる。角丸芝居と若太夫芝居はのちの朝日座である。大西芝居（竹本座→戎座→浪花座），中芝居（中座，2003年（平成15年）に消失），角芝居（角座），そして竹田芝居（→弁天座）。角丸芝居をのぞいては，道頓堀五座とよばれた劇場がそろう。劇場が隣接したこの様相は，あたかもオフブロードウェイのような芝居町を形成していたことがわかる。通信文によれば，劇場のつくりがイギリスと同じだそうであるが，芝居を上演し，観客を入れるために必要不可欠なものの共

通性を示すであろうか。

再び，ワーグマンの通信文を金井氏の訳から引用する。

> 演技は日中通してつづき，さらに夜半までもおよび，その間人々は芝居の場所を離れずに食べたり飲んだり，煙草をふかしたりする。しかも彼らの便宜をはかって，劇場内部にも表の通りにも多数の飲食店があって，そこからいついかなる時でも，スープやかん酒さえついた食事を取り寄せることができる。

この部分は，当時の芝居茶屋のシステムに触れられている。周辺の芝居茶屋から食事を取り寄せたり，あるいは向いの茶屋に出向いて食事をとっては再び場内へもどったりしながら，一日中かけて芝居見物していた様子が伝えられている。挿絵をよく見ると，座席と座席の通路で飲食物をはこぶ人の姿や，箸で食べ物を口へ運びながら芝居見物する人々が描かれているのがわかる。

同時期の芝居町を描いた浮世絵を参考とするならば，たとえば三代広重の「古今東京名所猿若街三芝居」(6) には，明治期の東京の芝居街が描かれるが，芝居小屋の向かい側の芝居茶屋の二階から芝居小屋を見た光景がとらえられている。この例のように芝居小屋と茶屋は東西とも通りをはさんで営業する，というシステムが存在した。このシステムに関し，ワーグマンの目にはとても珍しく映ったものだと思わる。

さて，絵入新聞挿絵の検討をすすめたい。一体どこの劇場で何を上演しているところを描いているのか。上演について，このスケッチからは非常に検討がつきにくい。天井の垂れ幕に連なる六角形のかたちがおそらく座紋と関わりがあるかと考えられるが，その中までとらえられていないのでこれも確証がつかない。通常，歌舞伎を上演する劇場にあるはずの花道もないのである。描かなかっただけという可能性もあるが，天井の高さや俳優の演技なども，なにか西洋の劇場で上演される演劇に似た印象を受け，実際の場内をどこまで写していたものか，いささか不足を感じさせるものである。

4　戎座の外観

大阪の劇場を，今度はその外観をとらえたもので検討する。

「THE EXTERIOR OF A JAPANESE THETRE」(7) と題された資料を見てみようと思う。これは「THE ILLUSTRATED LONDON NEWS」ではなく，「THE GRAPHIC」に掲載された。「THE GRAPHIC」は，「THE ILLUSTRATED LONDON NEWS」に対抗して同じイギリスで1869年に創刊された週間の絵入新聞である。

副題に「地震で破壊された地区」とみえる。これは1891年（明治24年）10月28日におきた濃尾（のうび）地震のことをさしている。岐阜・愛知でマグニチュード８という記録が残り，日本の内陸部でおこった最大規模の地震だったようである。

描かれたのは戎座，大阪道頓堀にある劇場である。副題からすると，地震の影響が大きかった地区なのであろう。濃尾地震で被害が大きかったのは，文明開化の象徴ともいえるレンガ造

りの建造物だったといわれ，その中で戎座が地震に負けず，残っていたので描いたのであろうか。画家の名は「Mr. C.E. FRIPP」と記載される。

発行日の11月14日ならば，地震が10月に起きた後のスケッチということになるが，図中の成人女性はみな日傘をさし，氷屋がでており，どうみても夏の様子とみえる。したがって，地震の前のスケッチを「地震の被害があった地区」として掲載したことも考えられる。

戎座はのちの浪花座で，その以前は竹本座，さきほどとりあげた芝居町の地図の「大西芝居」の場所にあたる。天災のたびに破壊され，興行主が変わり，時代に合わせて建築を新たにする。明治日本の劇場はその姿を転々と変えたのであるが，戎座もその例にもれない。

5 「日本の劇場のしつらえ」

今度は，同じく「THE GRAPHIC」から，「INTERIOR OF JAPANESE THEATRE」(8) H.ウッズという画家による，都をどりの開始と同じ明治６年のどこかの劇場を描いたものである。

他の資料が劇場の外観や劇場の内部をカメラワークでいえば，「ひき」でとらえたものが多いなか，珍しい「クローズアップ画像」であるのが特徴といえる。上半分が舞台，下半分が観客席を描く。どちらかといえば，客席を主に描いている。なかでも目立つのは水兵服を着た西洋人である。手前に描かれた人々は髪型や服装から中国人かと思われる。様々な外国の観客が多く客席を埋めている様子である。この挿絵においては，芝居の内容はあまり重要視していないようであり，それよりも，「インテリア」と題されるように，たとえば，手燭をもつ黒子の存在であるとか，蠟燭の明かりだけの照明であるとか，裃をつけた登場人物であるとかに興味があるように見える。ところが，裃の描き方や着物が左前になっているところなども見つかり，日本人絵師の作品にはありえない部分が含まれるところが，いかにも和装の経験のない外国人絵師のとらえた姿なのである。

6 「新富座の外観」

大阪の劇場を続けて見てきたので，東京の劇場を描いたものを取り上げたいと思う。

着目したい次なる資料は「AN AFTERNOON AT THE SHINTONI THETRE, THE LYCEUM OF TOKYO, JAPAN」(9) である。「シントニ」と表記されているが，東京の新富座である。1889年（明治22年）７月の発行であるが，例によってもう数ヶ月以前の様子かと思われる。

明治期の浮世絵には新富座を描いた劇場図が多いので，いくつか比較検討の材料としたい。

たとえば，「府下第一の劇場・新富座」(10) を見比べると，「THE GREPHIC」の挿絵がほぼその外観を忠実にとらえていることがわかる。壁に飾られた絵看板，劇場前を行過ぎる人力車，ガス灯，すべて近代化された劇場の姿が伝えられている。また，「東京第一之劇場新富座大當ノ図」(11) で比べ見ても，やはり掲げられた絵看板，ガス灯，通りの様子も海外の新聞挿絵と

通じる。人物に注目すれば，洋服を着た人，中国服に辮髪の人などがみえる。挿絵の「シントニ」（表記のまま読めば）劇場は，明治20年頃の新富座とみてよいことが決定できる。

7　劇場前の木戸芸者

劇場図，とくにその外観を描いた挿絵の検討を続けたいと思う。次の例は「La thétre au Japon : La parade. –Dessin de L. Crépon d'après use peinture japonaise.」(12) である。

「LE TOUR DU MONDE」に載せられたもの。これはフランスの絵入新聞である。裏に日本の劇場に関しての文章があり，「ラ・パレード」について書いている部分がみえる。

この挿絵で最も気になるのは，木戸芸者が描かれていることである。そこで参考に同じ構図の劇場図を浮世絵で比べ見てみる。

木戸芸者を描いて優れた例として初代豊国筆「中村座の外観」(13) が挙げられるだろう。木戸芸者の様子が描かれる江戸後期の中村座の外観を描いたものである。木戸芸者は，劇場の前で，上演中の芝居の内容を寸劇的に，役者の声色をまねるなどしながら解説し，観劇意欲をそそるという役割で，特に初日には必ずあったものである。劇場前を通る人々をひきつける，インパクトの強いものだったと考えられる。「いつもの」日本の大衆にさえそうなのであるから，外国人の挿絵画家には非常に印象深かったはずである。この挿絵画家もその様子にひきつけられて，スケッチしたものと思われる。

図中には，看板が描かれており，文字は「仮名手本忠臣蔵」と似てみえる。さらに，木戸芸者たちの上に絵看板が描かれているのがわかり，ちょうどその真中あたりに，駕篭に乗ろうとしている女性（女形）の絵がある。その絵は「仮名手本忠臣蔵」の六段目の一場面とみられ，同じ場面を芝居絵で確認したい。確認する対象例は幾らもあるのだが，筆者は初代国貞による「仮名手本忠臣蔵　六段目」(14) を用いた。初代沢村訥升（のちの五代目沢村宗十郎）の早野勘平，初代坂東玉三郎（のちの初代坂東しうか）のおかる，四代目坂東三津五郎（のちの十一代森田勘弥）の一文字屋才兵衛。おかるが駕篭に乗せられて身売りされる場面だが，挿絵の絵看板はやはりこれと同じ構図と確認できた。

そして，この劇場前の光景だが，明治初期の新富座前などとは全く異なった印象を持つ。具体的に説明すれば，ガス灯もなければ，人力車の姿，外国人，洋服，断髪の人もいないのである。そして，先の仏語による通信文にも「トウキョウ」の文字はみえず，「Edo」とある。発行年月日の記載のない資料であるが，これらから推測して江戸末期か，明治初年頃までのものと考えられる。

では，どこの劇場を描いたものか。その鍵は木戸芸者たちの頭の上にある提灯にある紋にあり，それが市村座の座紋と判断できる。したがって，この資料は幕末から明治初年頃，『仮名手本忠臣蔵』を上演中の市村座の劇場前を描いたものといえる。

おわりに

以上，限られた資料を通しての考証ではあるが，海外絵入新聞が近代前夜の日本の芸能の姿から西欧化を目指す日本の芸能の変化までを客観的に描いた記録であることは確かである。また，芸能を描いたものの多くが必然的に劇場内部図もしくは外部図を兼ねている。浮世絵に描かれた劇場図の画法との違いなどについては，今後さらに調査をすすめてみたいと考えている。

外国人報道画家たちは，政治や外交の場における日本の幕末・明治の姿と，大道芸や芝居小屋で芸人や役者たちに熱狂する日本の民衆の様子，各都市で繰り広げられる芸能の諸相，それらの各々を見ていたといえる。当時の日本人でさえ，そのようにあらゆる側面を見ていた者は少ないのではないだろうか。海外絵入新聞の通信のなかで，日本の文化に取材したものの多くが芸能をめぐったものである，ということには，外国人報道画家の眼から芸能とそれに興じる人々の姿に最も「日本」あるいは「日本的なるもの」を見出していたことが想像される。ワーグマンの指摘したバレエと舞の差異などにもあらわれていたが，彼らはそのほかにも随所に相違点を見ていたに違いない。劇場内部を描く図の多いことにも，上演内容のみならず，観劇する人々が飲食をしている様子，様々な身分や人種（開国以降）が観客席をうめる様子が報道画家たちにとっての興味の対象となっていたことが明らかである。筆者が意外に思うのは，劇場内部をよく描きながら，花道や回り舞台という日本独自あるいは日本発の劇場機構についてあまり触れられていない点である。報道に携わる彼らが，元来はあまり演劇に親しんでいなかった人々ではないか，と感じる。来日して日本の芸能に魅了されたということであろうか。海外絵入新聞の挿絵を見るとき，小さな島国の小さな芝居小屋で誕生する四次元世界，その異質性へむけられた探求のまなざしに出会える。そして，その「まなざし」が現代の日本文化にむけられるものと同質，なんら変化のないもののように思われてならない。そのことを良しとするか、悪しとするかが日本の文化水準を決定づけるともいえる。

（注）

（1） 金井圓編訳『描かれた幕末明治』1973年，雄松堂書店。

（2）「YOKUHAMA」の表記は原資料のまま。「THE ILLUSTRATED LONDON NEWS」より。発行年月日は「Aug. 10, 1861」。

（3）「THE ILLUSTRATED LONDON NEWS」より。発行年月日は「Feb. 15, 1873」。

（4） 社団法人京都市観光協会および祇園甲部歌舞会が発行するパンフレット「都をどり」に掲載される英文沿革紹介は以下のとおり。

How Miyako Odori Startrd

People of Kyoto were very concerned that Kyoto would go downhill after the relocation of the capital to Tokyo at the Meiji Restoration.

（中略）

In March of 1872, as a sideshow of the EXPO, the dance ‘Miyako Odori Jyunicho’ created by Masanao Mikimura, was performed with the chorus Matsunoya, located in Gion shinbashi. This performance was the start of the current Miyako Odori.

（5）「THE ILLUSTRATED LONDON NEWS」より。発行年月日は「Jan. 11, 1868」。
（6） 明治期，三代広重画。
（7）「THE GRAPHIC」より。発行年月日は「NOVEMBER 14, 1891」。
（8） 発行年月日は「JULY 19, 1873」を見ることとする。
（9）「THE GREPHIC」より。発行年月日は「JULY 6, 1889」。
(10) 明治期，三代広重画。
(11) 1881年（明治14年），三代広重画。
(12)「LE TOUR DU MONDE」より。発行年月日の記載なし。
(13) 江戸後期，初代歌川豊国画。
(14) 1835年（天保6年）森田座，初代歌川国貞画。